



▲ユカリさん、中学校の入学式にて

父親が日系2世、母親が日系3世で、自身は日本で生まれ育ったユカリさん。その心の片隅にいつもあったのは、ブラジル国籍であるというアイデンティティーの問題でした。

7歳の時にブラジルで7か月暮らし、日本に帰国してブラジル学校に入学しました。しかし、上手く学習が進まず、小学2年生の時に日本の小学校に転校、と同時に日本語適応教室にも通いました。その教室で出会った先生の厳しい指導と自身の努力で日本語も上達しました。

親身になって指導してくれた先生の影響と、外国人にルーツをもつ子どもたちのために、今後は自分が役に立ちたいとの思いがあり、教員を目指す決意をし、大学卒業後に中学校の英語教師になりました。

新任教師として当初は、自分が“外国人”であることに対して子どもたちの保護者が戸惑うのではないかと不安だったそう。初めての挨拶で「私は日系ブラジル人です。そのことでご心配をおかけすることもあるかもしれませんが」と話したところ、一人のお母さんから「先生が外国人だから不安ということはない、子どもたちのために一生懸命やってください」と激励の言葉をかけられ、受け入れられているという実感とともに、その気持ちに応えたいと思ったそうです。同僚の先生からは、外国籍であるがゆえに講師のままで教諭になれないユカリさんに、同じ仕事をして更に翻訳業務まで

互いに思いやる関わり

茶屋道 レナタ ユカリさん

しているのに教諭になれないのはフェアじゃないと応援してくれたこともうれしかったと言います。

外国籍の生徒からは、「将来は先生のように日本の社会で活躍したい」、「先生はどのように勉強を続けたのか」と尋ねられ、彼らの学習意欲を引き出したことに喜びを感じたとも。ユカリさんのいた中学校には約1割の外国人生徒がいました。担当していた学年のブラジル人の生徒が生徒会長に立候補し当選しました。ユーモアのある彼が皆をリードできるように、まわりの生徒たちが彼をサポートするのを見て感動した思い出があります。

教会関係の仕事も含めて教員以外にもいろいろ活動していたユカリさんは、ライフスタイルが合わなくなり、4年間の教師生活に終止符を打ちました。

「子どもたちにとって、いつでも自分らしくあることが何より大事。そのためには、アイデンティティーを隠すことなく、他の人にはない『自分の良さ』として理解し、行動することで、将来の道もきっと開ける。また、日本に来たばかりの子どもは学習意欲が湧かず、気持ちが落ち込むことが多い。家庭では学校での出来事などを母語で子どもたちにいっぱい聞いてあげてほしい。日本で生まれ育った子どもが抱える一番の問題はアイデンティティーのこと。日本人でも外国人でもない中途半端な心持ちから生じる悩みが親にきちっと伝わらず、そうした子どもたちがジレンマを抱えている」とユカリさん。

ユカリさんはこれからも教会の活動を通じて、外国にルーツをもつ子どもたちや保護者の方々に寄り添っていききたいと考えています。



▲研究授業の様子



私は日本の住民です!

ポッダル プロビル クマールさん

クマールさんは来日して20年を超えますが、その大半は名古屋に住んでいます。名古屋はセントレア(中部国際空港)が近く、とても住みやすいそうです。バンラデシュで大学に

通っていましたが、最先端の生産管理技術を身につけたという気持ちが募り、日本に来ることを決めました。最初は、大学で研究している叔父を頼りに、日本での大学進学を目指して、東京で日本語を勉強しました。その後、名古屋に住む友人の就職面接に同行したところ、クマールさんがその会社に就職することになりました。日本で社会人としての生活が始まり、これまで働いたどの会社でも経営者や上司に親切にしてもらい、技術指導を叩き込まれたと言います。周りのサポートや彼自身の地道でたゆまない努力、知識の修得と経験の積み重ねにより、厚生労働省認定の国家資格であるプラスチック成型技能士1級の資格を2012年に取得しました。また、今年には外国人初の技能検定委員に任命されました。

クマールさんは、日本社会に貢献したいとの思いから、本業以外にも様々なボランティア活動に従事しています。地域の多文化共生の推進を目的に、名古屋市緑区で様々な事業を展開する「みどり多文化共生ボラネット」の設立に参加、現在も中心的な役割を果たしています。また、障がい者の支援活動を行う「AJU自立の家」では、通訳としてサポートしています。

こうした活動のきっかけを聞いてみると「やってみないと誘われたから」と笑顔とともに答えが返ってきました。日本での暮らしや活動を支える原動力は、彼の温厚でフレンドリーな性格に加え、「頑張れば何かできる、何かを成せばその後のステップアップにつながる」

という信念だと言います。日本に来て感じた日本人の印象は、誰もが正直だということだそうです。正直な相手には信頼感が生まれ、気持ちよくポジティブに物事を進められる。ひとつの物事が成されれば、次への勇気につながり、いいサイクルが生まれるとのこと。

「外見は違っても、考え方は日本人と同じ。税金や社会保険料も同じように納め、日本の文化やルールに沿って生活している。自分を外国人とは思っていない」と話します。だからこそ「自分が外国人として扱われることはとても寂しい」とも。子どもが参加している中学校のバスケットボールの部活で、他のメンバーたちを自分の車で送ってあげることがあるそうです。みんな感謝してくれるし、挨拶もしてくれます。しかし、バスケットボールの試合会場では、父兄が自分から離れたところに座ろうとすることに気づきました。そんな時はどうしても縮められない、こころの距離を感じてしまうそうです。

そして、日本に長い間住んでいても一番苦手で馴染めないことがあるそうです。「なんだと思いますか。それは、言いにくいことを遠回しに言われることです」と笑いながら語ってくれました。

クマールさんはこれからも、自然が豊かで大好きなこの日本で暮らしていきます。



▲交流会の出演者と。前列中央がクマールさん

世界中を席卷する新型コロナの猛威が収束し、また以前のように国境を越えてモノやヒトが往来する時が来れば、日本に来る人も日本から出る人も多くなるでしょう。その時、私たちは外国人を「受け入れる」側にも、外国人として「受け入れられる」側にもなり得ます。多様な文化的背景をもつ人たちが、同じ地域に共に暮らす住民として、同じ職場の仲間として、同じ学校のクラスメイトとして、お互いに認め合い協働していくことが不可欠です。

現在、名古屋市には140を超える国・地域にルーツをもつ人々が住んでいます。今回の特集が、多文化共生に基づく社会をつくるヒントになればと思います。